若草園を支える会 会報
後援会だより

平成23年(2011)9月11日発行　第８号
事務局：社会福祉法人 栄光会 若草園 内
〒787-0155 高知県四万十市下田２２１１
Tel (0880)33-0247/Fax 33-0518
IP電話(050)3344-8850
会長：山﨑祥正

取引口座　郵便局 ０１６１０－５－９６３２ 社会福祉法人 栄光会　若草園
幡多信 下田支(普)００８３４９７「若草園を支える会」会長山﨑祥正

機関紙『わかくさ』第１８号をお届けします．．．．．

◆ 小さな善意 大きな力に

前回号にて本会の平成２３年度会員を募集しましたところ、８月末日現在で約６５０名の加入があります。募金総額も100万円に届きました。各市町村の民生児童委員協議会や校長会を通じても多くの方が善意を寄せて下さっています。浄財を捧げて下さったみなさま、本当にありがとうございました。

最近の報道では、またもや児童虐待の暗いニュースが相次いでおります。この被害者の数多くを受け入れて心身ともに社会復帰に向けて、子どものために日夜働いている幡多地域唯一の児童養護施設若草園。『若草園を支える会』の活動はますます有意義です。引き続きご協力をお願い申し上げます。

◆ もうやめようかと思った時に

タイガーマスク現象で多くのマスコミが若草園にもやってきた。彼ら独特の気さくな雰囲気で、にわかに“業界に通じる人”になった錯覚がした。いずれも「何か情報があれば、ご連絡ください」と名刺を置いて帰った。その名刺もまだ机の脇に見えている頃、東日本で災害が発生し、若草園の子どもの発案で市内に募金活動に行った。私が引率したスーパーには新聞記者がやってきた。朝、出がけにふと名刺が目に止り、言われた通り電話をしたので、写真を撮りに来てくれたわけだ。

記者は申し訳なさそうに「行く先々で募金募金で、単身赴任の私が募金して貰わないといけないくらいです…（笑）」。「いえいえ、お互い様。私も幾らしたか分かりません。取材に来ていただいただけで構いませんよ」。

子ども達の「募金をお願いします！ 東北の人のために、お願いします！」との声が響いた。善意ある市民の方々が募金箱に手をさしのべてくれた。カメラの音が響いた。「ありがとうございました！！」。明るい子ども達の声も響いた。いろいろな角度からシャッターチャンスを狙っての取材はしばらく続いた。

一通りの構図をおさえたのだろうか。満足げに記者は「ありがとうございました。支社に記事は上げますが、編集権は無いので、必ずしも掲載できるとは約束できませんが…」。そう言って、ポケットの財布から千円札を取り出して子どもの抱える募金箱へ差し入れた。「あっ、気を遣っていただかなくても、いいのですよ」。「いえ。今日は、募金はもうやめようかと思った時に、子ども達の声が心に響きましたので…」。

オレンジリボンには子ども虐待を防止するという意味があります。

翌朝、子どもの笑顔に手を差し伸ばす市民の姿の写真と共に、活動は報じられていた。コラムのタイトルは「小さな善意 大きな力に」だった。

◆故郷に錦を飾った卒園児

中間決算を前に金額的には去年をしのぐ勢い。
なぜか。
皆様の関心が高い。確かに。会長と顔を見合わせて「ほんとに、ありがたいことやね」。
それに加えて、一昨年度と去年度に運転免許資金の提供を受けた卒園児からの大口寄付が相次いで、目下の募金総額の２割を占めている。
“借りたものは返す”という社会通念。担当の職員からその常識を教えてもらって借りた。
非常識な環境で育った彼らは、資金援助を受けた事に対して、その教えられた後天的な“常識”観念でキチンと支える会に返済をしてくれている。
彼らは皆様の支援金によって免許も取得できて、無事に就職もできた。決して高給取りではないが、それなりの収入を得られ自立できるようになった。今まで“利用者の処遇改善”との大義名分のもと、社会福祉法人であるこの施設は努力はしてきたつもりではあった。
が、果たしてそれがこの子らにとって充分であったかどうかは一抹の不安がある。「これからは自分のしあわせの為にお金を使え」。心のどこかではそう言ってやりたい。
しかし彼らの思いは違った。彼らはこれほどにまで律儀に恩返しをする。
なぜか。
同胞愛。後輩を思う気持ち。
タイガーマスク運動が華やかかりし頃。――随分昔に思うが、今年の話。まだ１年を過ぎていない。世の中の話題の遷り変わりの早さにはあらためて驚く。各局がきそって児童養護施設のドキュメンタリーや密着番組を打ち出した。今でも印象に残っているものが２つ。
１つは県内の白蓮寮での取材。来年高校を卒業する少女が、大学進学を目指していたが、学力的にも経済的にもメドは着きそうだと言うのにとり辞め、就職に進路変更した。密着記者の質問に少女は答えて言った。「自分には妹たちが居るので、その子らが卒業した時に支えて上げられるように、自分は就職をして、お金を貯めたい。苦労させたくないから」。
もう１つは、従前から寄付やボランティアをし続けている土木建設会社経営者への取材。彼は臆することなく口を開いた。「私もこの施設の出身なんですよぉ。今、自分は成功させて貰っているから、自分に出来る事でこの施設のためにしてやろうと思いましてねぇ」。
見た目の大小はあっても、若草園でも同じ。大阪や東京や、冷え切った高知県内での就職もままならぬ彼らは、古里を後にした。そして、お盆時季やお正月時季に園に顔を出してくれる。……後輩達へのお菓子など、手土産を持って。久しぶりのお兄ちゃんお姉ちゃんに群がる子どもたち。あたかも大人数家族の兄弟のよう。21世紀の核家族には無い光景だ。
まるで本当の兄弟姉妹のように、故郷に錦を飾った卒園児は、もう立派な社会人。文字通り輝ける青年となっている。
つくづく「この仕事をしていて良かったな」と思う瞬間である。しかし、そんなに手放しで喜べるものでもない。
なぜか。
これはキレイ事。底辺を這いずり回っている子がいるのも、また事実だから。
今、若草園を支える会は、成功者だけでなく、脱落して消え入りそうな子どもの支援も視野に、もっともっと子どもに寄り添った活動にならないか、役員会で検討に入った。理解が得られにくい、誤解が生じやすい支援になるかもしれない。了承されずに支援者が激減したらどうするのか？ そんな現実的な意見もある。
本当に困っている者に実際には手が届かない、福祉にも盲点はあるというのだろうか？
　美談だけでは済まされない現実があります。お伝えするのに困難を覚えています。どうか、共に考えませんか。本当に子どもを救援すると言う事について。皆様のご意見をお待ちしております。（事務局：瀬戸）

事務局直通メール
wakakusaenjimu@yahoo.co.jp